小説世界のロビンソン

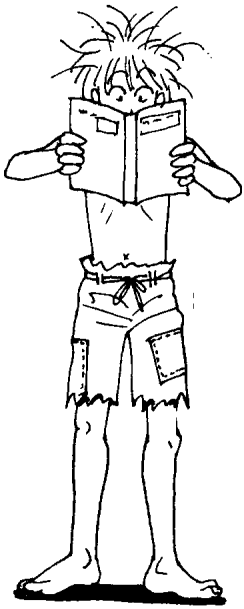
小林信彦

新潮社

小説世界の
ロビンソン

小林信彦

新潮社



小説世界のロビンソン

1989年3月15日印刷　1989年3月20日発行

■著　者　小林信彦

■発行者　佐藤亮一

■発行所　株式会社新潮社
郵便番号162　東京都新宿区矢来町71　振替東京4—808
電話　業務部(03)266—5111　編集部(03)266—5411

■印刷　株式会社光邦　■製本　大口製本株式会社

定価1300円

© Nobuhiko Kobayashi 1989, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-331814-7　C0095

目次

序　章　船出……7

第一部

第一章　下町の子の〈正しい〉読書……16
第二章　岩窟と地底の冒険……24
第三章　集団疎開と「夏目漱石集」……33
第四章　「吾輩は猫である」と落語の世界……42
第五章　「吾輩は猫である」と自由な小説……50
第六章　「吾輩は猫である」と乾いたユーモア……59
第七章　「吾輩は猫である」とフラット・キャラクター……67
第八章　〈探偵小説〉から〈推理小説〉へ……75
第九章　推理小説との長い別れ……83
第十章　「落語鑑賞」と下町言葉……91

第二部

第十一章　遅いめざめ——1950……102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十二章　太宰治――マイ・コメディアン……109
第十三章　フィールディング――〈散文による喜劇的叙事詩〉……117
第十四章　ピカレスク小説――または〈人生は冷酷な冗談〉……125
第十五章　1952年のスリリングな読書……133
第十六章　物語の極限――「ラブイユーズ」……141
第十七章　小説が古びるときとは……157
第十八章　ワンス・アポンナ・タイムマシン――または〈退屈な〉私見……165
第十九章　〈視点〉の問題……174
第二十章　ロック元年の小説世界……182
第二十一章　未知との遭遇＝〈大衆文芸〉……188
第二十二章　「富士に立つ影」と〈茫々たる時〉……196
第二十三章　古い〈大衆文学〉の衰退と〈エンタテインメント〉の発生……204
第二十四章　エンタテインメントの〈正しい〉姿……212

第三部

第二十五章　三十年ののち――または〈物語〉のゆくえ……220

第二十六章　早過ぎた傑作「火星人ゴーホーム」……228
第二十七章　K・ヴォネガットの場合――SFから主流（メインストリーム）へ……236
第二十八章　ブローティガンの場合――「愛のゆくえ」について……245
第二十九章　J・アーヴィングの場合――〈物語〉の力と読者の関係……254
第三十章　二十七年前の「『純』文学は存在し得るか」を読みかえして……262
第三十一章　いわゆる〈純文学とエンタテインメント〉をめぐって……270
第三十二章　「瘋癲老人日記」の面白さ……278
第三十三章　作家の誠実さとはどういうものか……303
第三十四章　新聞小説の効用……311
終章　とりあえずの終り……327
附章　メイキング・オブ・「ぼくたちの好きな戦争」……335
あとがき……359

小説世界のロビンソン

序章　船出

世間一般から見れば、そもそも、小説そのものが〈あってもなくってもいいもの〉なのだから、小説についての野暮ったい評論やエッセイのたぐいは、五代目古今亭志ん生のいう〈なくってもなくってもいいもの〉であり、下町生れのぼくの美意識からみれば、〈殆どあってはならないもの〉でもあって、隅田川へ打っちゃっちまいな、と吐きすてるように言いたいところである。

ここで打ち切ってしまえば、すべてがわずか二百字で終ってしまうわけで、それでもいいような気がしないでもないのだが、もうひとりのぼくは、〈いやいや、そういうものではない〉と、これまた、山の手の書斎人風に顔を顰めてみせるのである。思えば、ぼくの生き方、発想、思考法は、つねに下町と山の手のあいだを振り子さながらに揺れ動いており、時と場合に応じて、重心の置き方が変るようだ。

それにしても、この種の文章の〈入り方〉は、なかなか、むずかしいもので、

「四万六千日、お暑い盛りでございます」

ぴしりと決めて、「船徳」に入る八代目桂文楽のようにはいかない。

エドウィン・ミュアの「小説の構造」は、次の一行で始まる。

「この本の目的は小説における構造の原理を調べてみることです。」

あ、そうでしたか――という感じである。いや、からかってはいけない。この名著に大きな影響を受けたぼくとしては、あとで、いろいろと引用するにちがいないからだ。

ついでに、E・M・フォースターの「小説の諸相」の書き出し（喋り出し？）をみてみよう。

「この講座はトリニティの評議員ウィリアム・ジョージ・クラークの名と由縁があります。今日ここに私どもが集まったのは彼のお蔭でありますから、彼を通じて講義の主題に近づいてみましょう。」

駄目だ、こりゃ。だらしなくなった蛸の刺身みたいだ。

仕方がない。困った時はこの手でいくしかない。すなわち――〈新聞によれば〉。

一九八三年十二月一日づけの朝日新聞夕刊によれば、「一九四五年以降に、英語で書かれた小説のなかで、ベスト12を選ぶとすれば、なにか」という問いを英国の書籍市場委員会が発し、三人の選者がこの問いに答えたのだそうである。つまらないことをしたもので、英国は日本よりずっと小説が売れない国だから、〈ベスト12フェア〉でもやるつもりなのか。

三人の選者は、エリザベス・ハワード（作家）、リチャード・ホガート（ロンドン大教授）、ピーター・パーカー（前英国鉄総裁）で、ぼくの知らない人ばかりだ。約二カ月かけて、十二冊に絞りきれず、十三冊になったというが、13という数字も良くない。

その十三冊とは――

ジョージ・オーウェル「動物農場」
イヴリン・ウォー「名誉の剣」三部作
ウィリアム・ゴールディング「蠅の王」
エリザベス・テイラー「天使」
キングスレイ・エイミス「きみに似合いの女の子」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ソール・ベロー「ハーツォグ」
ポール・スコット「支配」四部作
アントニー・ポーウェル「時の調べに合せての舞踏」
グレアム・グリーン「名誉領事」
アイリス・マードック「海よ、海よ」
ウラジミール・ナボコフ「ロリータ」
J・D・サリンジャー「ライ麦畑でつかまえて」
アイビー・コンプトン＝バーネット「召使いと侍女」

驚いたことに、ぼくが読んだのは「動物農場」「蠅の王」「ハーツォグ」「名誉領事」「海よ、海よ」「ロリータ」「ライ麦畑でつかまえて」の七冊で、しかし、三部作、四部作が未読だから、半分にみたない。それにしても、エリザベス・テイラーなんて作家がいたのかとか、「海よ、海よ」がそんな傑作だろうか、などと、首をかしげたくなる。

一東洋人がそう思うくらいだから、〈当地の文学界〉は大変だそうで、〈自分の作品がはいった作家のキングスレイ・エイミス氏は「まあまあの結果だ」と満足しているが、取りあげられなかった作家アントニー・バージェス氏はかんかん。「自分が同意できるのは、イヴリン・ウォーだけだ。フォークナーの『館』やメイラーの『裸者と死者』がはいっていないのはおかしい」と批判している〉という。

このイヴェントの教訓は——

1　まちがっても、こうした企画を立てるべきではないし、少くとも選者になってはいけない。(選に入らなかった作家全部に恨まれるから。)

2　ぼくたち——いや、ぼくは(いかに偏った選考であれ)これだけ高く評価されているイヴリン・

ウォーの全貌を知らない。それどころか、知らない作家、作品があまりにも多い。

3　日本における英国の小説の紹介のされ方は、どこか、おかしいのではないか。（グレアム・グリーンは全集が出ているのに、イヴリン・ウォーの翻訳は数がすくなく、しかも絶版になっている。）

4　つまり、ぼくは、（いちおう英文学科を出ているにもかかわらず）英国の小説について、あまり知らないのではないか。

〈驚いた〉とぼくが書いたのは、主として、4に関してである。なんとかしなければならない。

だが、右の〈驚き〉は、単に、ぼくが不勉強だった、とか、近年アメリカの小説に気をとられ過ぎていた、というに過ぎない。要するに、大したことではない。

もっと大きな驚き、読書をめぐる状況の大きな変化を教えられたのは、八一年十一月に教育テレビ（「若い広場」）の「マイ・ブック」というコーナーに出た時である。

それは自分が若いころに影響を受けた本について短く語る番組であって、ぼくは（まことに恥ずかしながら）、「晩年」「落語鑑賞」「トニオ・クレーゲル」について喋りたいと言った。

打合せに拙宅に見えた女性は、大学ノートをひろげて、「トニオ・クレーゲル」は畑正憲さんが喋っているけれど、だいぶ時間が経っているから、いいでしょう、と言う。「それにしても、『トニオ・クレーゲル』をあげる作家の方が多いですねえ」

録画の当日、また、その話が出た。テレビ局のスタッフやホステス役の女優さんは、「晩年」を読んでいるかどうかはともかく、太宰治のどの作品かは読んでいた。「落語鑑賞」も――ぼくのは昭和二十四年の苦楽社版だが――「わが落語鑑賞」と名乗って筑摩叢書のドル箱であり、某文庫の安藤鶴

夫シリーズによっても知られていた。

だが、「トニオ・クレーゲル」は――だれひとり知らないのである！　当日、ぼくが持って行ったのは、実吉捷郎訳の岩波文庫（昭和二十七年五月の第一刷）であったが、「古びた感じがカンロクがあっていい」とカメラマンが呟いただけだった。

そのうちに、スタッフの一人が、それは「ベニスに死す」に入ってるやつではないですか、と言いだした。ルキノ・ヴィスコンティの映画「ベニスに死す」が輸入されたとき、原作の文庫版を買ったら付いていたというのである。その文庫版をぼくは知らなかったのだが、「ベニスに死す」と「トニオ・クレーゲル」を一冊にしてあるという。「トニオ・クレーゲル」は遂に、レコードでいうところのB面になったのか、というのが、ぼくの想いであった。

「そうすると……」

〈青春〉という言葉がギャグの一つになっているのを知っているぼくは、おそるおそる、たずねた。

「いわゆる〈青春の書〉というのは何なのですか、いま？」

昭和二十年代でいえば、太宰治、堀辰雄、あるいはヘッセの「車輪の下」、トーマス・マンの「トニオ・クレーゲル」、カロッサの「幼年時代」、カミュの「異邦人」――と、書いているだけで尾骶骨のあたりが涼しくなってくるような〈青春の書〉又は〈通過儀礼〉は、時代が変ったとしても、あるはずだ、と、ぼくは信じていたのである。

不意の質問に、スタッフの人たちは当惑気味であった。全員、これといった本が思いつかない様子である。といって、劇画・漫画のたぐいでも無いという。

ぼくが思うに、ビートルズの音楽が〈通過儀礼〉だった時代があったはずである。具体的にいえば、昭和四十年前後からの何年間かであるが、ひょっとしたら、その辺りで〈青春の書〉は消滅したので

はないかとも思う。
また、フォーク・ソングが私小説の代りをつとめた時期があった。フォーク歌手ではないが、中島みゆきの歌の聴かれ方は、昔のカルト的私小説の読まれ方に近いとぼくは見ている。

作家であるぼくが、こんなことを言ってしまっては具合が悪いかも知れないが、ある種の感情、ムード、気分を他人に伝えようとする時に、それが活字でなければならない必然性は別にない。一枚の写真、一小節のメロディに活字はとうてい敵わないと思う時があり、視聴覚メディアを羨しく思うことが多い。だが、カメラマン、ミュージシャン、映画監督といった職業の友人たちにいわせると、活字メディアに敵わないと思う時があるという。
いわば、ケース・バイ・ケースであるが、右のような屈折した思いとは縁がなく、いまだに〈活字が最高〉と頭から信じ込んでいる人間がいて、妙なことを口走ったりするから、話がややこしくなる。
一つの例をあげよう。
「本の雑誌」という不思議な書評誌が浮上してきて、既成の書評紙・書評誌が色褪せてしまったことがある。
この雑誌は、本好きの人たちが集まって、好き勝手な文章を書くことから始まったもので、ショッキングな要素は別になく、ましてや書評の革命を起そうなどという気持はなかったとおぼしいが、思想書と純文学はとりあげず、山手樹一郎についてのエッセイとか、ふつう見かけることのない雑誌の紹介、婦人雑誌の読破といった無邪気さに徹したために、かえってショックをあたえた。
書評紙＝ツマラナイという公式をくつがえしたために、編集長がスターになり、あろうことか、橋本治氏のいうところの〈死にぞこないのメジャー〉である大新聞が、〈売れてるマイナー〉たる編集

長に雑誌評のコラムをたのむ、という、はなはだ見識のない事態になった。

さて、「本の雑誌」であるが、それじたいは決して尖鋭でも軽薄でもない。まれに純文学に触れる筆者がいるが、それを読むと、意外に常識的・保守的であり、文壇のとりあえずの秩序に寄りそっていて、つまらない。大ざっぱにいえば、二十代、三十代の読書家のための雑誌というのが現在の位置づけであろう。

にもかかわらず――というエピソードが、最近の三十二号の巻頭に紹介されている。

「本の雑誌」の代表格の人物が、酒場で〈良心的出版で知られる小出版社の人〉に紹介された。

「本の雑誌」を知っていますか、という紹介者の問いに、〈良心的出版社〉の中年男は、「いや、申し訳ないけど存じ上げません」と答える。

それだけなら、ともかく、

「今はいいけれど、そのうち壁にぶつかるのじゃないですか」

と言い出した。

〈存じ上げ〉なくて、批判する、というのが、そもそも矛盾しているのだが、〈軽い〉ものが売れるのは〈論理〉や〈思想〉よりも〈気分〉が優先する時代だからで、そんな時代に迎合している雑誌が続くはずはない、と言外に匂わせたらしい。

以下は、直接、引用する。

〈それだけなら酒の席の話として聞き流すつもりでいたが、件(くだん)の彼、最後に一言つけくわえた。「ぼくの言うこと、わかりますか?」質問ではない。口を歪めながら見下す口調である。〉

〈昔は多かったのである。最近少なかったので、こういう反応は久しぶりだった。〉

〈……日本の出版界に横行する〝志〟の脆弱さを、久しぶりにふと思った。〉

この文章を読んだ時、ぼくは失笑するよりも、憤りを覚えた。〈良心的出版〉を自負するズレた中年男が、趣味的な雑誌の代表者に「ぼくの言うこと、わかりますか？」と口を歪めて、旧左翼インテリ風に迫っている光景――これも、読書状況の変化を示すグロテスクな戯画の一つではなかろうか。

これから、ぼくが試みるのは、小説とはどのような発生をし、どのような進化をしてきたか、現代の小説はどのようにあり得るのか、それが映像や音楽にはならず小説でなければならないのは何故か、といったことを、あくまでも、ぼくの体験に即して考えてみることだ。ついては――

A　過去のさまざまなジャンルの小説をもう一度読みかえし、記憶の彼方に去った〈方法〉やら〈実験〉をもう一度洗い直してみる。

B　それらを教養書風にではなく、ぼくの前に現れた順に記す。かっこうをつけた言い方をすれば、出逢いの記録、である。（この方法は「日本の喜劇人」ですでに用いており、ぼくとしては、ある程度、経験と手応えを持つ。）

C　その結果は、ぼく自身の作品に反映するだろうし、たぶん、小説についての論議を、今までより開かれたものにするだろう。

といったことを考えてスタートするのだが、実は、次のたのしみが大きいのである。

D　これを機会に、ディケンズやエリオットやオースティンの未読の長篇や新しい評論が読める。

E　過去に読んだもの――「富士に立つ影」、「美男狩」、「恋愛対位法」（オルダス・ハックスリーだぜ）などを読みかえして、幸せな時を過す。

もちろん、過去の小説論のたぐいは、随時、紹介、または引用したい。ひとことでいえば、〈小説の面白さ・快楽〉を追究してみたいのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com